

# 建築と庭園の結びつきにおける工芸の役割

—昭和初期の西川友孝による著作を通して—

## The Role of Crafts on the Relationship between an Architecture and Its Gardens: Through the Writings of Tomotaka Nishikawa During the Early Showa Period

田中栄治\*  
Eiji TANAKA

### Abstract

In this paper, I have considered the writings of the landscape architect – Tomotaka Nishikawa, during the early Showa period and the quarterly magazines that he had edited. Nishikawa highlighted the importance of the relationship between a house’s architecture and its gardens and the significance of the linkage between the architects and landscape architects. He had also defined the term “garden crafts” to include a wide range of artifacts that were used in the residential gardens as well as other garden structures and architectural elements. The important roles of the “garden crafts” were “to enjoy the outdoor life” and “to communicate with the interior” of the architecture and its garden. In addition, it became evident that Nishikawa was aiming for a comprehensive research to correlate the three professions – architecture, landscape architecture, and crafts, along with the people involved in these three professions. Furthermore, Nishikawa’s interest in the role of architects, landscape architects, and other technicians in the practice of tourism was also found to have been expanded.

キーワード：西川友孝, 建築, 庭園, 工芸, 結びつき

## I はじめに

### 1. 背景と目的

明治期以降の日本では、日本人の生活様式及び住宅形式に欧米からの影響がみられるようになり、しだいに古い因襲を受け継いだ日本の伝統的な住宅ではなく、生活の合理性を持った欧米の住宅形式を取り入れる動きもみられるようになる。ただし、欧米からの直接の移入による住宅形式は、そのままでは日本の気候や日本人の生活に馴染まなかったため、日常的な生活は日本の伝統的な住宅形式を踏襲し、来客時の応接などに新しく欧米から入ってきた洋館や洋室の形式を取

---

\* 関西国際大学 現代社会学部

り入れる、いわゆる日本風と欧米風の二重生活が行われるようになる。これに対し、大正期から昭和初期の生活改善運動における住宅改良の動きの中で、当初は近代化する日本の住宅として西洋化を目指した動きが多くみられたものの、次第に新しい時代にふさわしい日本人の新しい近代化された生活様式の確立と、それに適した新しい日本の住宅形式を求める意見が出てくるようになる。この新しい日本の住宅形式を考えるために、欧米の形式の表層的な採用ではなく、耐震性や衛生面、生活の合理性などを取り入れることと、日本の伝統的な住宅形式の良さを見直すことの、欧米と日本の双方の良さを取り入れることが手がかりになるとする議論が行われるようになる。この時、日本の伝統的な住宅形式の良さを見直す着目点としてあげられているのが、庭との一体感や戶外生活の心地良さなど、日本の四季に対応した「自然との融和」であった<sup>注1</sup>。

新しい日本の住宅形式として「自然との融和」を手がかりとする考え方は、住宅における建築と庭園の結びつきを求めるようになる。さらに、旧来の「接客本位」「鑑賞本位」の庭園から、「家族本位」「実用本位」の「戶外の室」としての新しい庭園の役割の重要性が増していくことになった。その上で、昭和初期には住宅と庭園の空間的な結びつきのみではなく、建築家と造園家との連繫が主張されるようになる<sup>注2</sup>。その中でも、特に西川友孝は建築と庭園の結びつきにおける工芸の重要性を主張し、建築・造園・工芸の3種の職能が連繫することにより、近代化した新しい日本の住宅をつくり出すことができると考えた造園家である。さらに、後年西川は建築・造園・工芸の3種の職能が連繫することが日本の観光事業に役立つと考え、関心の幅を観光方面へ広げている。

そこで本稿は、西川が主張した建築と庭園の結びつきにおける工芸の役割についてより詳しく考察することにより、今後の住宅及び庭園の設計のための手がかりを得ることを目的とする。また後年の西川の観光事業への関心の広がりを見ることにより今後の建築界と造園界、工芸界の連携への示唆を得ることを目的とする。

なお、西川に関する既存研究としては、西川亮らによる研究(2015)があるが、これは戦後復興期における建築・造園・工芸の3種の職能の連繫による観光技術家協会の活動や西川をはじめとする協会会員の観光論に関する研究であり<sup>注3</sup>、昭和初期の西川の住宅における建築と庭園の結びつきにおける工芸の役割、および西川の観光事業への関心の広がりに関する研究は、これまでほとんど行われてこなかった。また、西川の著作に関しては、筆者はこれまでに西川の編著書である『造庭建築』(1936)を中心に、住宅における建築と庭園の連繫、および建築家と造園家の連繫の視点から考察を行った<sup>注4</sup>が、今回は西川による『造庭建築』以外の著書を中心として、特に建築と庭園の結びつきにおける工芸の役割の視点からの考察を行うこととする。

## 2. 造園家 西川友孝

造園家 西川友孝(1906-1985, 図1)は、1906(明治39)年に東京で生まれ、1928(昭和3)年3月に林学博士上原敬二が校長を務める東京高等造園学校(のちの東京農業大学地域環境科学部造園科学科)を卒業したのち、上原が運営していた上原造園研究所に勤め、その傍ら七曜社建築造園事務所を共同運営した。西川は、著書として『庭園工芸と室内装飾』(1929)、『近代的な小住宅』(1930、のち1936年に『近代的な住宅と小庭園』として再版)などを発行し、1931(昭和6)年から1932(昭和7)年には季刊誌『建築・造園・工芸』の編集を行うなど、執筆・編集活動を精力的に行った。その後、西川は1935(昭和10)年から東京府庁、1937(昭和12)年から滋

賀県庁に勤務して観光事業に携わり、『観光事業概論』(1936)、『観光実務の指導』(1938)を発行した。その後東京に戻り、1939(昭和14)年から東京高等造園学校で講師を務め、1943(昭和18)年からは財団法人東亜旅行社(終戦後には財団法人日本交通公社に改称)に勤務した。終戦後の1946(昭和21)年には日本観光連盟に入社し、建築・造園・工芸の3種の職能の連繋による観光技術家協会の設立に参加している。1947(昭和22)年には日本観光施設株式会社を設立し、1948(昭和23)年からは再び滋賀県庁に勤め、その後は滋賀県において観光事業に携わった。1961(昭和36)年に滋賀県庁を退職したのち、西川造園設計事務所を設立と同時に滋賀日日新聞社にも籍を置きコラムなどの執筆を担当した。その間、『庭の造り方』(1958)を出版し、1964(昭和39)年に造園設計事務所連合(現一般社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会)が結成された時のメンバーのひとりでもある。1985(昭和60)年に没<sup>注5</sup>。なお、西川の2歳年上の兄・西川友武は、インダストリアルデザイナーであり、商工省工芸指導所において意匠部部长や指導部部长を歴任した。終戦後には日本電報通信社(のちの株式会社電通)にデザイナーとして勤めた。1933(昭和8)年に、アルミニウムを用いた椅子のデザインで国際コンクールのグランプリを受賞している。著書として『工芸学概論』(1935)、『玩具の研究と製作』(1936)などがある。



図1 西川友孝 25歳の頃

## II 庭園工芸と室内装飾

### 1. 庭園工芸

西川が東京高等造園学校を卒業した次の年、1929(昭和4)年に出版した『庭園工芸と室内装飾』(図2)は、上原が巻頭の序において「今迄に、庭園全体に亘っての著書は可成り多く出版されたが、こうして細部のみを集めて一冊としたものは恐らくこの本が初めてであろう<sup>1)</sup>」としているように、庭園の歴史や鑑賞の仕方、つくり方などのそれまでの庭園書と異なり、庭園の細部に着目した点に特徴があり、この著書の中で西川はまず「庭園工芸」という概念の定義を行っている。西川は「庭園工芸とは、庭園内において工芸的価値を發揮すべき人工的な作品及び庭園的に取り扱われる工芸品<sup>2)</sup>」であるとし、そこには庭園建築物、庭園家具、庭園添景物、庭園装飾、庭園構造などを全て含んだものであるとしている。ここでは、石や樹木などの自然物を主な材料とする庭園の中であって、西川の「庭園工芸」はいわゆる工芸品のみではなく、建築物や家具をはじめとして、庭園内にある人工物のうちで工芸的価値を發揮するもの全てを含んでいるとしている。

また、西川は「庭園工芸」が建築と庭園の結びつきに役立つとしている。まず西川は「私達は



図2 西川友孝『庭園工芸と室内装飾』資文堂書店 1929

住生活の理想として、庭園と住宅とが一つに融合され、住宅が『室内生活地』であれば庭園は『室外生活地』であることを望んでおります<sup>3)</sup>としている。ここには、大正期から昭和初期の生活改善運動において、住宅の庭園改造の議論の中で出て来た実用本位の庭園としての「戸外の室」の考え方をみることができる。また、「そういった生活の楽しみを味わうには、室内と庭園の間に、溝があってはならないわけでしょう。この溝を除くために大変役立ってくれるものが『庭園工芸』の数々なのです<sup>4)</sup>とし、住宅における建築と庭園の結びつきが重要であるとした上で、新しい日本の住宅形式において「自然との融和」を実現する手がかりとして「庭園工芸」が大変役に立つとしている。さらに、西川は「室内装飾」が「庭園工芸」と離して考えるべきものではないとし、室内で自然の美しさを味わうための「室内庭園（インドア・ガーデン）」にも言及している。西川は「室内庭園」は「室内装飾としての庭園工芸」であるとして、室内から庭園へ、庭園から室内へと、建築と庭園の結びつきをつくり出す手法のひとつであるとしている。

『庭園工芸と室内装飾』の中で、西川は「親しみ易い庭園」として、それまでのいわゆる「お金持ちの飾物」の庭園ではなく、住み手が普段から利用できる庭園とするのにも「庭園工芸」が役に立つとしている。まず西川は「近づき難いような大庭園は、所謂『富豪の飾物』でしょうが、誰でもが極く安易に、くつろげる庭園というものは私達にも必要なもの<sup>5)</sup>であるとしている。ここで西川は、従来の日本の伝統的な庭園のような「接客本位」「鑑賞本位」の庭園ではなく、「家族本位」「実用本位」の「戸外の室」としての新しい庭園が必要であるとし、大正期の生活改善運動における庭園改造の議論で出てくる「文化庭園」<sup>注6</sup>を想定していることがわかる。そして、西川はこのような文化庭園を費用もかからず少しの工夫で造るには「庭園工芸」の利用が一番だとしており、「これらの庭園工芸は、決して立派なものであることを望みません。気分のよいもの、庭園との調和よきものでありさえすれば、それが例え、廃物利用であっても構わないわけです<sup>6)</sup>」としている。

『庭園工芸と室内装飾』において、西川が「庭園工芸」として具体的に取り上げているものは、門、柵囲と垣根、階段と露壇（テレース）、縁廊（パーゴラ）、庭亭（ガーデン・ハウス）、飾鉢、室内庭園（インドア・ガーデン）、庭園家具（ガーデン・ファニチュア）、庭園照明、芝生と花壇、庭泉（ファウンテン）、プール、橋、彫塑と彫像、日時計、鳥の家と水飲盤、遊戯器具と物干場である（図3、4）。西川の「庭園工芸」が、飾鉢、庭園家具（ガーデン・ファニチュア）などのいわゆる工芸品から、門や柵囲、階段、露壇（テレース）、縁廊（パーゴラ）、庭亭（ガーデン・ハウス）などの建築に付属する工作物、さらには芝生という植栽までを含んでおり、幅広くとらえていることが改めてわかる。これらのうち、特に西川は、露壇（テレース）については「住宅と庭園との連絡機関」とし、飾鉢について

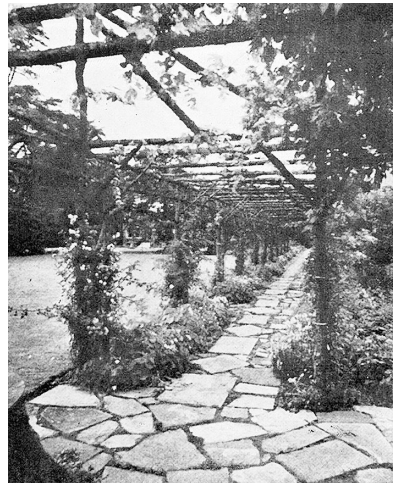


図3 庭園工芸 舗石と縁廊（パーゴラ）



図4 庭園工芸 落ち着いた戸外の室



は室内と庭園の両方に用いられるものとし、庭園に芝生をつくれれば戸外室として利用できるとして、建築と庭園の結びつきにおける工芸の役割に関する記述がみられる。

また、室内庭園（インドア・ガーデン）については、その中のひとつの事例として西川の師である上原敬二が提唱した「座敷温室」を取り上げている。

住宅と庭園を密接な関係に置く為の一つの、新しい室内庭園であります。／現在造られています温室というものを、単なる栽培室としてではなく、立派な室内庭園として役立たせたものなので、住宅に接続して半分は温室、半分は応接間とします<sup>7)</sup>

住宅の間取として殊更建てられるサン・ルームよりも、却って色々に役立ってくれます。一つの座敷温室は、サン・ルームとしても又応接室とも、花卉その他の栽培室とも、或は少し面積を広く取って子供室にも使えるでしょう<sup>8)</sup>

ここで、西川の「庭園工芸」が建築の一部分までをその範囲に含めていることがわかる。また、植栽の緑のあるガラス張りの明るい空間を応接室や子供室に使うということは、日本人の新しい近代化された生活様式のための住宅形式の提案となっている。

## 2. 室内装飾

『庭園工芸と室内装飾』の中で、西川は当時の生活改善運動における住宅改良や庭園改造の動きに対して、「室内装飾」(図5)の改良が遅れてしまっているとしており、生活の本質を忘れていることがその原因であるとしている。

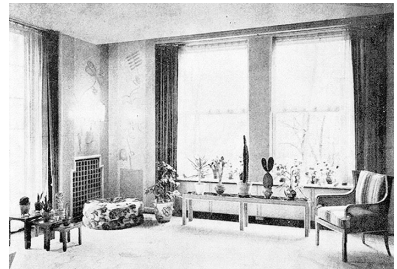


図5 室内装飾 明るい室内

この原因は、まず世間の人々が生活形態に就て不理解なためです。勿論、習慣とか経済とかも相当大きな原因となっているかも知れませんが、要は、現在の住宅改良論者といわれる人々がその形体美とか構造とか、或は衛生設備とか、の所謂具体的なことのみを主として肝腎な生活の本質について考えることを忘れていたような状態が、一番いけないのではないかと思うのです<sup>9)</sup>

ここでは、西川は人々の生活形態への不理解が「室内装飾」の改良の遅れのもとであるとしながら、それには生活の本質を考えない住宅改良論者に原因があるとしている。ここには「室内装飾」についての造園家である西川と住宅改良を提唱する建築関係者との間の意識の違いをみることが出来る。では、西川は「室内装飾」について具体的にどのように考えていたのかをみると、西川はまず「住宅は飽くまで人々の休息の場所慰安の世界でなければなりません。[…中略…]それには、その部屋が気持のよい、趣味で飾られていなければなりません<sup>10)</sup>」とし、西川は「趣味」という言葉を使って説明している。その上で「部屋を気持ちよく飾るといって、一寸贅沢なことのよう考えられるかも知れませんが、実はそうではなく自分達の生活に相応してその部屋を気持ちよく、高尚な空気と支配するというに過ぎないのです<sup>11)</sup>」としている。そして、西

川はこの時に椅子やテーブルなどの工芸が、住まい手の趣味を満足させるものでなければならぬとし、「室内装飾」における工芸の重要性を指摘している。また、「室内装飾」は「庭園工芸」と離して考えるべきものではないとしている。

新しい庭園工芸は、建築に附随するものでもなく、又独立に発展するものでもなく、室内の慰安である「室内装飾」と手を結んで、出来る限り自由に、それぞれの部所に、ゆとりと暖か味、そして親しみを与えるようなものでなければならぬ<sup>12)</sup>

西川は、「庭園工芸」と「室内装飾」とが調和していることが建築と庭園の結びつきをより安易に、滑らかにすると考えている。なお、『庭園工芸と室内装飾』において、西川は「室内装飾」として、扉、壁面、窓飾、家具、装飾画と壁掛、敷物、照明、色彩についての考察を行っている。

ここまで、『庭園工芸と室内装飾』では、西川の考える「庭園工芸」が、一般的な工芸品よりかなり広い幅を持っており、建築に付属する工作物や、「座敷温室」という建築の一部分までも含めてとらえられていること、また大正期から昭和初期の生活改善運動における住宅改良や庭園改造を背景として、新しい近代化された日本の生活様式のための新しい住宅形式を考えるときに、日本の伝統的な住まいの良さである「自然との融和」を実現する手がかりとして「庭園工芸」が役に立つとしていたことがわかった。さらに、「室内装飾」については、自分達の生活にふさわしく部屋を気持ちよくすることが必要で、「庭園工芸」と切り離すことのできないものであり、「庭園工芸」と「室内装飾」とが調和していることが建築と庭園の結びつきをより安易に、滑らかにすると考えていることがわかった。

### Ⅲ 近代的な小住宅

#### 1. 小住宅

『庭園工芸と室内装飾』を出版した次の年、1930（昭和5）年に西川は『近代的な小住宅』（図6）を出版した。この著書の中で、西川は「私達の住生活というものは、住宅と庭園の二つのものから成り立っているものです。[…中略…]ですから、住宅と庭園とは、初めから二つのものに分けて考えるべき性質のものではありません<sup>13)</sup>」とし、西川は住宅における建築と庭園の結びつきの重要性について『庭園工芸と室内装飾』と同様の主張を行っている。

建築家にしろ、造園家にしろ、共に私達の住生活の根拠地を設計するわけですから、徒に機械的に或は数理的に、住宅と庭園を結びつけて了うことはよくないことです。／建築家と造園家とは、互に手を取り合って、完全な「人間の住家」を作るべきです<sup>14)</sup>

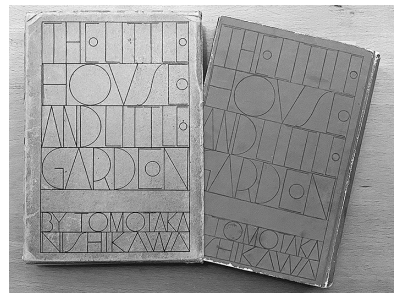


図6 西川友孝『近代的な小住宅』  
資文堂書店 1930



図7 明るい芝生と庭壁による庭園

ここで、西川が建築と庭園の結びつきの重要性とともに、建築家と造園家の連繋の重要性も指摘している点は、『庭園工芸と室内装飾』での建築と庭園の結びつきが重要であるとする主張をさらに発展させていることがわかる。また、昭和初期には、特に造園家の側から建築家と造園家の連繋の提言がみられる<sup>注7</sup>が、西川もそれと同じ考えであったことがわかった。その上で、西川は著書のタイトルでもある「近代的な小住宅」について、以下のように定義している。

近代的な小住宅とは住居の為の建築と庭園によって作られるものだ、という定義を下したいと思うのです。／言い換えるならば、室内生活地が「住宅」であり、室外生活地が「庭園」であるということになります<sup>15)</sup>

ここで、西川は単に建築としての住宅だけではなく、住居のための建築と庭園の両方が一体となったものが近代的な小住宅であるとしている。この西川の主張は、新しい日本の住宅形式として「自然との融和」を手がかりとするこの時代の考え方と一致している（図7、8）。

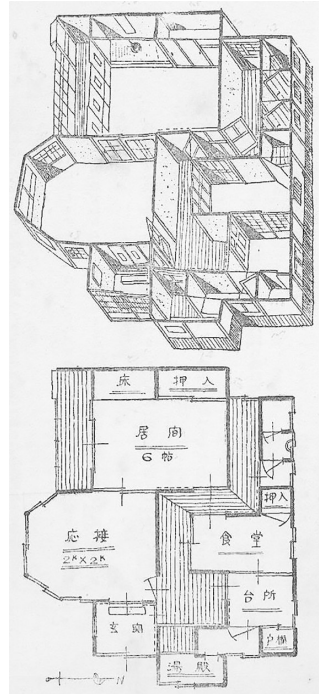


図8 小住宅習作

## 2. 小庭園

『近代的な小住宅』において、西川は「庭園は私達の理想的な住生活を地上に繰りひろげたものだということが出来ましょう。自然という大きな恩恵に浴す為には、私達は『庭園』の力を借りねばなりません<sup>16)</sup>」とし、近代的な小庭園も住宅と同様に家族本位に考えられなければならないとしている（図9）。

家族本位の庭園というものが果して実用主義のみによって生れるか否かという問題は、余程考えねばならぬことだと思います。／何から何まで「実用、実用」の一点張りでゆこうとするのは、私達の趣味や性格をなくしてうものではないでしょうか<sup>17)</sup>

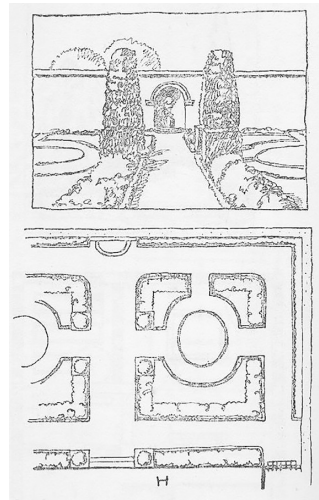


図9 小庭園習作

当時の生活改善運動における庭園改造の中で、田村剛の『実用主義の庭園』（1919）をはじめとする実用主義の考え方による庭園が議論されているのに対して、西川は疑問を投げかけている。西川は日本式庭園と洋式庭園の長所、短所を比較研究した結果、近代日本の生活に最も適応した新しき庭園として「折衷式庭園」の提案を行っている。

新しい庭園を創造するには、今迄ある二つの大きな様式－日本式と洋式－の統一、調和、

融合によって生まれるものだと言えるのです。／即ち、ここに「折衷式庭園」と呼ぶものは、様式としての和洋両様式の折衷と、実用、鑑賞の二つの目的の折衷とを指したもののなのです。／この折衷式庭園こそ、新らしき庭園ではないかと、私は信じるのです<sup>18)</sup>

西川は、この日本式と洋式の2つの様式を単に並べるだけの折衷ではなく、2つの様式を統一し、調和させ、融和することにより実用と鑑賞の両方の目的を折衷した新しい庭園を創造できるとしている。この考え方は、昭和初期の住宅の建築についても同じことがみられる<sup>注8)</sup>が、ここでは西川が建築や庭園の様式の問題にも言及している点が重要である。さらに、ここで西川は『庭園工芸と室内装飾』にはなかった新たな視点として、都市と小庭園、あるいは郊外と共同庭園についての考察を行っている。

都市という大きな家に住む家族である市民達は、矢張り各々、自分の生活を、より安全により安んずる為に、自分達の緑と空地を持つように努めねばなりません。／そこで、私は、都市住宅が、総て「小庭園」を持ってくれることを望みたいのです。少なくとも「住宅地域」には、緑と空地とが、その各戸にあって欲しいと思うのです<sup>19)</sup>

さらに西川は、「都市生活者の中、小庭園以上のものを望む人々の為に『共同庭園』を都市の郊外に設けることにしたい<sup>20)</sup>」としている。ここでは、西川の関心が単に一軒の住宅のみではなく、都市や郊外の住宅地に広がっていることが重要である。

### 3. 庭園工芸

西川は『近代的な小住宅』において、さらに『庭園工芸と室内装飾』で定義した「庭園工芸」についても言及している。

新しい庭園は、そこに幾多の新しい設備を要求します。それは、今迄の庭園が、ただ単に観賞に終始していたのに比べて、新しい庭園が実用を加味して来た以上、室内に或は住宅に、工芸的な設備が施されるのと同様、庭園にもそうした設備—言い換えれば「庭園工芸」が必要なものとなりました<sup>21)</sup>

西川は、住居のための建築と庭園の両方が一体となった近代的な小住宅には「庭園工芸」が必要であるとし、住宅の建築と庭園の結びつきにおける「庭園工芸」の重要性を指摘している点は、『庭園工芸と室内装飾』と同じである。さらに、西川は「庭園工芸」の誕生は、新しい庭園の提唱と時を同じくしたものであるとした上で、「庭園工芸」の役割について、『庭園工芸』といいますのは、取りも直さず、私達が戸外生活—庭園生活を楽しむ為に設計される設備であり、又、室内生活と室外生活との連絡をよくしてくれる設備である<sup>22)</sup>とし、さらに詳しく説明している。

庭園工芸の重大な使命は何か。ということを考えてみましょう。[…中略…] 庭園工芸というものは、戸外生活を楽しく美しいものとする為にも是非必要な設備だということができるのです<sup>23)</sup>



「庭園工芸」の重大な役割「室内との連絡」のお話に移りましょう。／戸外生活と室内生活との連絡—言い換えれば庭園と室内の連絡は、私たちの住宅に於て、最も安易に、最も滑らかに、何の溝もなく結ばねばなりません。[…中略…] 庭園と室内とが今迄より以上に接触し、室内から庭園へ、そして庭園から室内への連絡を完全にしたならば、必然的に室内生活の延長が庭園へ向けられ、戸外生活の延長が室内へと向けられるに違いありません。／そこで、初めて庭園と室内は一つのものに融合され、最も快よく美しい住生活を送ることが出来ようと思います<sup>24)</sup>

西川は、「庭園工芸」の重大な役割として「戸外生活を楽しむこと」と「室内との連絡」を挙げている。さらに、室内に自然を取り入れることも考えるべきであるとし、それが室内と庭園を連絡する新しい方法であるとしている（図10）。これは、『庭園工芸と室内装飾』における、「自然との融和」を実現する手がかりとして「庭園工芸」が役に立つとし、また「庭園工芸」と「室内装飾」とが調和していることが建築と庭園の結びつきをより安易に、滑らかにするという西川の主張をさらに発展させたものであると考えられる。

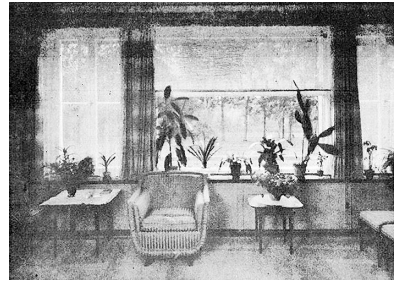


図10 窓と草花とがよき調子を生む居間

ここまで、『近代的な小住宅』では、西川が『庭園工芸と室内装飾』で提示した「庭園工芸」の考え方をより発展させ、「戸外生活を楽しむこと」と「室内との連絡」を「庭園工芸」の重大な役割としていた。また、住居のための建築と庭園の両方が一体となったものが近代的な小住宅であるとし、住宅における建築と庭園の結びつきの重要性、さらに建築家と造園家の連繋の重要性を指摘していることがわかった。その上で、西川の関心が住宅や庭園の様式の問題や、都市や郊外の住宅地の問題に広がっていることも重要である。

#### IV 建築・造園・工芸

1931（昭和6）年6月から1932（昭和7）年9月の間に、西川は季刊誌『建築・造園・工芸』第1集から第6集の編集・執筆を行った（図11）。『建築・造園・工芸』第1集巻頭の「第1集上梓に際して」において、西川は「発刊の趣意は、誌名の如く三造型芸術の鼎立連繋に依って、これが特殊なる総合的新研究を目的とする」<sup>25)</sup>とし、その特徴として「専門家以外の諸家が見た三つのそれぞれの造形芸術観—例えば、建築家のみた造園・工芸問題、工芸家のみた建築・造園問題、造園家のみた建築・工芸問題—等を掲載してゆきたい」<sup>26)</sup>としている。西川は『庭園工芸と室内装飾』（1929）において建築と庭園の結びつきの重要性とそこ



図11 西川友孝編『建築・造園・工芸』第1集 第6集 金星堂 1931-1932

に「庭園工芸」が役に立つとし、『近代的な小住宅』（1930）においてその考え方を発展させて、さらに建築家と造園家の連繋の重要性を指摘し、その上で『建築・造園・工芸』においては、それら3種の職能の鼎立連繋による総合的研究まで高めようという意図をみることができる。また、西川は3種の職能の鼎立連繋について以下のように記している。

全ての問題に対し、この三方面から眼を向けるということは、新しき時代を画する企てではなかろうか。建築と造園と工芸との三つの眼を通じて視るべき問題は数多くあるに違いない。その為には、今後は毎集一つの研究課題を拾い上げて、それをこの三方面から検討し、理論的にも技術的にも新しき動向を示して行くのも一方法ではないかと考える<sup>27)</sup>

西川は、さらに「本誌の誕生を期とし、これら三造形芸術に携わる人々の連繋をも望むものである」<sup>28)</sup>として、3種の職能に携わる人々が連繋することで新しい時代のための諸問題に対応できると考えている。その中には、西川の2歳年上の兄・西川友武も含まれている。

『建築・造園・工芸』第1集には、建築5本、造園6本、工芸5本の合計16本の論考が掲載されており、たとえば作庭家・日本庭園研究者の重森三玲による「庭園式建築に於ける新時代の工芸領域」や、建築家の竹内芳三郎による「庭園の社会性」など、それぞれの専門領域を超えた論考は、西川の編集意図によるものであると考えられる。なお、『建築・造園・工芸』第1集には、西川の兄・西川友武による論考「工芸指導の方法論」が掲載されているが、これはのちに彼の著書『工芸学概論』に繋がっていくものである。

西川は、『建築・造園・工芸』第1集に「小庭園時代へ」という論考を掲載している。その中で西川は建築・造園・工芸の3つの技術が、新しい時代の住宅を求める当時の住宅問題に対応していると考えている。

新らしき時代の住宅に就て、僕等は、実にしばしば考えさせられる。だが、現在では、住宅問題は建築と造園と、そして工芸との三つの技術の手を借りて、家屋と庭園と室内へとむけられるようになった。[…中略…] 僅かな空地でも、より集約的に利用して生活に近づかせることは、決して無意味な企てではない、一つの生活要素としての「住宅庭園」を、最小限度の中にもつということは贅沢ではない<sup>29)</sup>

ここで西川の論考のタイトルにある小庭園とは、従来の高価で贅沢な芸術品としての「接客本位」「鑑賞本位」の庭園ではなく、庶民のための「家族本位」「実用本位」の「戸外の室」としての新しい庭園であり、西川の『近代的な小住宅』での考察が反映されている。その上で、西川は小庭園の事例として、「屋上庭園」と「パティオ」を取り上げている。特に「パティオ」について西川は、小庭園と室内との連繋の密接さについて指摘している。

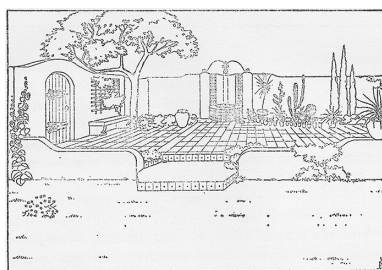


図12 規格的に纏められた庭園細部

パティオのよさは、室内との連繋の密接さにある。庭か、部屋か、そのケジメのつかぬる

もの程、パティオとしての真価があるのだとさえ言われる。故に、パティオを訳して、「中庭」「内庭」では物足りない。天井のない部屋、戸外の部屋、雨曝しの部屋等の言葉を当てたのも、その為であった。そして、パティオは、何処までもパティオとして、庭でもなく、部屋でもなく存在して来た<sup>30)</sup>

西川が自身の考えを「屋上庭園」や「パティオ」という具体的な小庭園の提案として提示している点は、『近代的な小住宅』での考察をさらに発展させているといえる。さらに西川は「規格的庭園」という考えを示し、小庭園は小面積であるが故に、ある程度まで規格化し得るであろうとし、それにはまず庭園の規格品たる「庭園工芸」が重要な要素として取り扱われなければならないとしている(図12)。

次第に小庭園は、規格化され、安価に、簡易に、より多くの人々の生活へ行き渡るであろう。それでこそ、初めて「ポプularityをもつ庭」も生れ、従来、手の届かなかった芸術品が、生活要素の一つとして、より多くの人々の所有となるであろう<sup>31)</sup>

これは、「庭園工芸」を規格化し、工業化することにより、より安価に、より簡易に入手できるようにして、より多くの人々が小庭園を持つことができるようにという考え方であり、大正期の生活改善運動における住宅改良の中で、安全で、明るく、衛生的で、楽しい、家族中心の「文化生活」を実現するために、手の込んだ、複雑で、使いにくい、高価な伝統的住宅ではなく、簡便で、無駄がなく、衛生的で、快適な「簡易住宅」が求められたのと同様であると考えられる<sup>注9</sup>。

ところで、『建築・造園・工芸』第1集については特定のテーマの設定はみられないが、第2集以降は特定のテーマを定めて、3種の職能の鼎立連繫により総合的に研究しようという西川の編集意図により、以下のようにそれぞれテーマを決めて編集・発行されている。ここでは、それぞれに掲載された西川の論考のタイトルを合わせて記載する。

第2集 テーマ：住生活の新方針、西川「新戸外生活と庭園家具」

第3集 テーマ：様式の出発点と方向、西川「仏蘭西造園の構成様式」

第4集 テーマ：材料の新研究、西川「庭園彫刻考」

第5集 テーマ：都市の新計画、西川「臨水都市の計画」

第6集 テーマ：技術の新研究、西川「水景に関する技術」

「住生活の新方針」がテーマの『建築・造園・工芸』第2集に掲載された西川の論考「新戸外生活と庭園家具」において、西川は今後の庭園家具は、庭園と家具との調和のために、造園家と工芸家の協力が必要であるとしている。

現在並に将来の戸外生活は、庭園家具の必要性を認め、今後は室内家具と同程度の関心をもって当たるべきものとなり、その使用目的も明瞭に意識されるべきである。即ち、休息、実用設備としての庭園家具への転換である。[…中略…] 庭園と家具との融和を考え渾然たる調和を生むことは、造園家と工芸家の協力によらねばなし得ない処である<sup>32)</sup>

ここでは、造園家の西川による工芸分野である庭園家具についての論考であり、造園と工芸の連携についての指摘である点は、『建築・造園・工芸』における西川の編集意図である、3種の職能の鼎立連繋による総合的研究と、3種の職能に携わる人々の連繋のうちの造園と工芸の連繋に関連する論考になっている。さらに西川は、『建築・造園・工芸』第2集において具体的な庭園家具の事例を挙げて考察している(図13)。

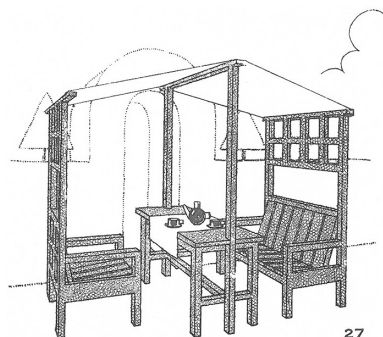


図13 庭家具のセット

ところで、西川は、『建築・造園・工芸』のテーマを第2集の身近な住生活から、第3集以降は様式、材料、都市、技術としている。これらについては、『近代的な小住宅』の中でもそれぞれについての記載があったが、西川の関心が住宅から都市へ次第に広がっていることがわかる。

ここまで、『建築・造園・工芸』では、西川は小庭園の提案によって『近代的な小住宅』での考察をさらに発展させながら、3種の職能の鼎立連繋による総合的研究、さらに3種の職能に携わる人々の連繋を目指していたことがわかった。さらに、西川の関心が住宅から都市へ次第に広がっていることがわかった。

## V 観光への展開

西川は、1935(昭和10)年から東京府庁、1937(昭和12)年から滋賀県庁に勤務して観光事業に携わり、著書『観光事業概論』(1936)、『観光実務の指導』(1938)を発行した。その間、1937(昭和12)年に日本造園学会の機関誌『造園雑誌』に掲載された西川の講演をまとめた「観光実務に対する研究 主として観光事業と造園技術の関渉に就て」(1937)において、西川は当時の状況について「観光事業が造園界の一つの新しい問題として採りあげられ、延いて造園家の観光実務に進出するもの漸く多く、観光事業と造園との関渉はいよいよ密接なるを思わしめるに至った」<sup>33)</sup>とした上で、観光事業が甚だしく広範囲にわたるため、将来的には観光実務は必然的に分科され、各々の技能に従ってその分担者を決定するべきであるとしている。

観光宣伝の実務を担当すべきものは意匠、構成、文案等宣伝広告に関する理論的実際的研究をなし、観光施設を分担すべきものは当然造園或は建築等の技術並に施設に対する計画、経営に就ての研究をなし、又観光接遇の実務に携わるものは凡ゆる接遇問題に対する考究がなされるべきである<sup>34)</sup>

西川は広範囲にわたる観光事業の中で、造園あるいは建築等の研究者・技術者は観光施設に関する技術および計画、経営について分担するべきだとしている。西川はその中でも特に造園は観光事業と密接に関連するとしている。

観光事業なるものを大局的にみる時、最も重要な資源とされるものは言うまでもなく風景資



源であり、風景資源を最も適切有効に活用し得る才能をもつ造園家が、この事業の実務に携わることが当然であるといえよう<sup>35)</sup>

西川は、観光実務の中での造園家の役割についての重要性を指摘している。また西川は、「観光地計画」という新しい造園分野を発見したとし、風景地の施設経営はもとよりあらゆる施設を包含せる観光地の計画を樹立し、これを造園技術によってなそうと考えていた。

さらに、西川は、最初に滋賀県に勤めていた1937（昭和12）年4月から滋賀県観光協会発行の機関誌『観光の近江』の編集・構成を担当している（図14）。その第1号では、執筆者として造園関係は上原敬二、関口鉄太郎、小寺駿吉、重森三玲、建築関係は佐藤功一、工芸関係は田邊孝次というように、3種の職能に携わる人々が参加しており、西川は編集後記において「この種の機関誌としては未曾有の盛観であろうと自負している」<sup>36)</sup>と記している。

なお、終戦後の1946（昭和21）年8月に建築・造園・工芸の3種の職能に携わる人々の連繋による観光技術家協会が設立された。西川亮らによる研究（2015）によると、協会設立時には役員を含めて（会友を含まない）建築関係者19人、造園関係者18人、工芸関係者17人の合計54人が参加し、その中には西川友武・西川友孝の兄弟も含まれており、ともに役員を務めている。観光技術家協会の活動は、観光関連の設計や計画の受諾、施設設計の提案、観光施設展覧会の実施、全日本観光連盟との連繋・技術的支援、情報共有・発信などであった<sup>注10)</sup>。

ここでは、西川の関心が、住宅における建築・造園・工芸の3種の職能による総合的研究や、それらに携わる人々の連繋から、観光地計画における造園家や建築家などの技術者の役割、さらに観光実務における建築・造園・工芸の3種の職能に携わる人々の連繋にまで広がっていたことがわかった。

## VI おわりに

本稿では、造園家の西川友孝が昭和初期に発行した著書および編集を行った季刊誌を中心に、ることにより、建築と庭園の結びつきにおける工芸の役割について考察を行った。

西川によるはじめての著書『庭園工芸と室内装飾』（1929）では、西川は新たに「庭園工芸」という言葉を提示している。それは、一般的な工芸品よりもかなり広い幅を持っており、建築に付属する工作物や、建築の一部分までも含めて捉えられていた。また大正期から昭和初期の生活改善運動における住宅改良や庭園改造を背景として、近代化する新しい日本の生活様式のための新しい住宅形式を考えるときに、日本の伝統的な住宅の良さである「自然との融和」を実現する手がかりとして「庭園工芸」が役に立つとしていることがわかった。さらに、「室内装飾」について

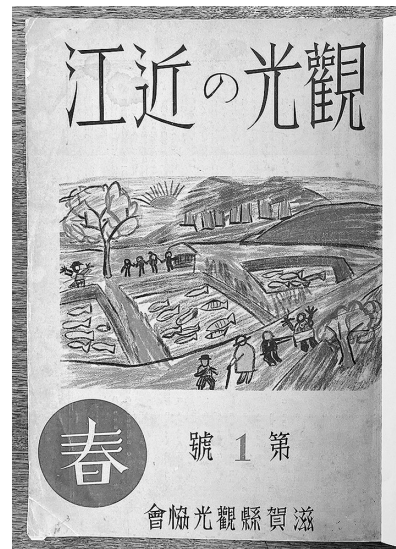


図14 『観光の近江』第1号  
滋賀県観光協会 1937

は、自分達の生活にふさわしく部屋を気持ちよくすることが必要で、「庭園工芸」と切り離すことのできないものであり、「庭園工芸」と「室内装飾」とが調和していることが建築と庭園の結びつきをより安易に、滑らかにすると考えていることがわかった。

『庭園工芸と室内装飾』の翌年に発行された『近代的な小住宅』(1930)では、西川が『庭園工芸と室内装飾』で提示した「庭園工芸」の考え方をより発展させ、「戸外生活を楽しむこと」と「室内との連絡」を「庭園工芸」の重大な役割としていた。また、住居のための建築と庭園の両方が一体となったものが近代的な小住宅であるとしており、住宅における建築と庭園の結びつきの重要性、さらに建築家と造園家の連繋の重要性を指摘していることがわかった。その上で、西川に関心が住宅や庭園の様式の問題や、都市や郊外の住宅地の問題に広がっていることも重要である。

1931(昭和6)年6月から1932(昭和7)年9月の間に、西川が編集・執筆を行った季刊誌『建築・造園・工芸』第1集から第6集では、西川は小庭園の提案によって『近代的な小住宅』での考察をさらに発展させながら、3種の職能の鼎立連繋による総合的研究、さらに3種の職能に携わる人々の連繋を目指していたことがわかった。

さらに、東京府庁や滋賀県庁で観光事業に携わった経験から、西川に関心が住宅における建築・造園・工芸の3種の職能による総合的研究や、それらに携わる人々の連繋から、観光地計画における造園家や建築家などの技術者の役割、さらに観光実務における建築・造園・工芸の3種の職能に携わる人々の連繋にまで広がっていたことがわかった。

これらのことから、西川の考える「庭園工芸」の定義、および住宅の建築と庭園の結びつきにおける「戸外生活を楽しむこと」と「室内との連絡」に対する工芸の役割が明らかとなった。このことは、今後の住宅の建築および庭園の設計の手がかりとなると考えられる。さらに西川の提案する3種の職能の鼎立連繋による総合的研究、さらに3種の職能に携わる人々の連繋の提案は、今後の建築界と造園界、工芸界の連携への示唆を与えてくれると考えられる。

#### 【注】

注1 田中栄治「雑誌『建築と社会』にみる戦前の関西の住宅－阪神間のモダニズム住宅 その2－」『神戸山手大学紀要』第8号, 105-118頁, 神戸山手大学, 2006において詳しく考察している。

注2 田中栄治「大正後期から昭和初期の関西の住宅における庭園の役割－阪神間のモダニズム住宅 その5－」『神戸山手大学紀要』第14号, 33-55頁, 神戸山手大学, 2012において詳しく考察している。

注3 西川亮・窪田亜矢・中島直人・西村幸夫「戦後復興期に活動した観光技術家協会に関する研究－建築・造園・工芸の職能に期待された役割」『都市計画論文集』vol.50 No.3, 日本都市計画学会, 2015による。

注4 田中栄治「昭和初期の住宅における建築と庭園－西川友孝『造庭建築』を中心に－」『神戸山手大学紀要』第16号, 19-36頁, 神戸山手大学, 2014において詳しく考察している。

注5 西川の経歴は、主に『西川友孝 遺稿集』発行者 西川節子, 1987によるが、年譜の一部の西暦と元号の年に食い違いがあるため、ここでは他の資料等から元号の年を正としている。なお、『西川友孝 遺稿集』の中に加藤五郎の文章によると、西川は阪急甲陽園にあった東亜映画で助監督をした経験があるとしている。

注6 田中栄治, 前掲書, 2012において詳しく考察している。

注7 田中栄治, 前掲書, 2014において詳しく考察している。

注8 田中栄治, 前掲書, 2006において詳しく考察している。

注9 田中栄治「雑誌『住宅研究』にみる大正期関西の住宅－阪神間のモダニズム住宅 その3－」『神戸山

手大学紀要』第9号, 97-108頁, 神戸山手大学, 2007において詳しく考察している。

注10 西川亮ら, 前掲書, 2015による。

【図版出典】

- 図1 『西川友孝 遺稿集』発行者 西川節子, 1987
- 図2 筆者撮影
- 図3 西川友孝『庭園工芸と室内装飾』資文堂書店, 口絵, 1929
- 図4 西川友孝, 同上, 口絵, 1929
- 図5 西川友孝, 同上, 口絵, 1929
- 図6 筆者撮影
- 図7 西川友孝『近代的な小住宅』資文堂書店, 口絵3, 1930
- 図8 西川友孝, 同上, 小住宅習作 PL.1, 1930
- 図9 西川友孝, 同上, 小庭園習作 PL.1, 1930
- 図10 西川友孝, 同上, 口絵18, 1930
- 図11 筆者撮影
- 図12 西川友孝編『建築・造園・工芸』第1集, 金星堂, 133頁, 1931
- 図13 西川友孝編『建築・造園・工芸』第2集, 金星堂, 口絵27, 1931
- 図14 筆者撮影

【引用文献】※引用に際し, 旧仮名遣いは現代仮名遣い, 旧字体は新字体に変更した。

- 1) 西川友孝『庭園工芸と室内装飾』資文堂書店, 序1頁, 1929
- 2) 西川友孝, 同上, 7頁, 1929
- 3) 西川友孝, 同上, 7-8頁, 1929
- 4) 西川友孝, 同上, 8頁, 1929
- 5) 西川友孝, 同上, 11頁, 1929
- 6) 西川友孝, 同上, 9頁, 1929
- 7) 西川友孝, 同上, 120-121頁, 1929
- 8) 西川友孝, 同上, 122頁, 1929
- 9) 西川友孝, 同上, 275-276頁, 1929
- 10) 西川友孝, 同上, 273頁, 1929
- 11) 西川友孝, 同上, 272頁, 1929
- 12) 西川友孝, 同上, 15頁, 1929
- 13) 西川友孝『近代的な小住宅』資文堂書店, 15頁, 1930
- 14) 西川友孝, 同上, 15頁, 1930
- 15) 西川友孝, 同上, 16頁, 1930
- 16) 西川友孝, 同上, 150頁, 1930
- 17) 西川友孝, 同上, 154頁, 1930
- 18) 西川友孝, 同上, 159頁, 1930
- 19) 西川友孝, 同上, 161頁, 1930
- 20) 西川友孝, 同上, 162頁, 1930
- 21) 西川友孝, 同上, 243頁, 1930
- 22) 西川友孝, 同上, 244頁, 1930
- 23) 西川友孝, 同上, 246頁, 1930
- 24) 西川友孝, 同上, 248-249頁, 1930

- 25) 西川友孝編『建築・造園・工芸』第1集, 金星堂, 1頁, 1931
- 26) 西川友孝編, 同上, 3頁, 1931
- 27) 西川友孝編, 同上, 3-4頁, 1931
- 28) 西川友孝編, 同上, 4頁, 1931
- 29) 西川友孝編, 同上, 125・127頁, 1931
- 30) 西川友孝編, 同上, 130頁, 1931
- 31) 西川友孝編, 同上, 132頁, 1931
- 32) 西川友孝編『建築・造園・工芸』第2集, 金星堂, 114-115頁, 1931
- 33) 西川友孝「観光実務に対する研究 主として観光事業と造園技術との関渉に就て」『造園雑誌』第4巻第2号, 日本造園学会, 120頁, 1937
- 34) 西川友孝編, 同上, 120-121頁, 1937
- 35) 西川友孝編, 同上, 121頁, 1937
- 36) 西川友孝編, 『観光の近江』第1号, 滋賀県観光協会, 64頁, 1937

【参考文献】

- ・田村剛『実用主義の庭園』成美堂書店1919
- ・西川友武『工芸学概論』工政会出版部, 1935
- ・森仁史「西川友武・友孝兄弟の1930年代」『日本古書通信』65(5) vol.850, 日本古書通信社, 2-4頁, 2000